様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　７ 月　６ 日現在

機関番号：４４５１８
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１６５５３

研究課題名（和文）スポーツ指導(コーチング)における「クロス・カルチャー」研究の検討

研究課題名（英文）Cross-cultural Research in Sports Coaching

研究代表者
中村　泰介（Nakamura, Taisuke）

園田学園女子大学短期大学部・その他部局等・准教授

研究者番号：３０４５４６９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：　フランスナショナルサッカー学院(I.N.F.)ディレクターのJean-Claude Lafargue氏との調査研究では、日本のジュニアユース年代のJリーグ下部チーム、民間クラブチーム、中学校部活動の3チームにてトレーニング実践のフィールド調査を実施し、①日本人選手の主体性の希薄さ(指導者の問題点も踏まえて)、②理論から実践にリンクさせる作業、③フィロソフィーの中で評価する視点が提出された。カンタベリー大学(NZ)のRichard Light教授とのコーチングの研究調査からは、コーチ中心的なコーチングから、日本型の「Athlete-Centerd Coaching」の構築への知見が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　海外スポーツ指導現場の研究が皆無に等しい中，海外の現地調査を通じたスポーツ指導の研究は極めて意義のあることである．また，指導者のグローバル化が進む中で，海外と我が国の指導法をクロス・カルチャー的な研究を通じた研究成果は，現場に有意義な知見を与えるものであり，コーチング研究に大きく寄与するものであると考える.また喫緊の課題の，体罰・暴力なきスポーツ指導の再構築へ向け，指導方法の思想的なフィールドへのアプローチは，スポーツ界のコーチング分野において最重要な作業であると同時に，優れた指導法を後世に継承するための，一知見としても大いに期待できるものであると考える.

研究成果の概要（英文）：This study was conducted in conjunction with Jean-Claude Lafargue, director of Institut national du football de Clairefontaine (I.N.F.). The subjects included a professional academy team, a private club team, and junior high school movement activities club in a junior youth organization in Japan.
The results revealed the following.1) Japanese players lacked independence, which appeared to be linked to the Coaching problem.2) Practice was linked to theory.3) The view whether a player would accept the philosophy of a club and team was estimated.
Subsequently, a study in which Richard Light, a professor at Canterbury University in New Zealand, and the author exchanged ideas was conducted. The Japanese-style development of athlete-centered coaching was considered in the study.

研究分野：コーチング

キーワード：クロス・カルチャー　コーチング哲学　スポーツ育成年代　Athlete-CenteredCoaching　フランスサッカー育成哲学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

我が国の若年層年代のスポーツ実践の形態は学校教育の中に位置付けられている運動部活動によるものが極めて多い傾向にある．それは，これまでの「教育の中でスポーツを実践することについて」の議論の文脈からみて，教師がコーチを兼ねて行う指導が問題視されると同時に継承されているという二局化の現状をつくっている根本問題でもある．その問題は，実践現場の指導に対して，スポーツ指導(実践)は「教える行為なのか？」それとも「導く行為なのか？」といった，指導者にとっても(場合によっては)実践者にとっても曖昧な実践の形態を作り出しているといえる．

各国の指導法の実態はまさに多種多様である．申請者はこれまで指導現場をフィールドとしたコーチングの質的研究をすすめ，フランス，スペイン，メキシコの育成年代で，指導言語と選手のパフォーマンスの研究を通して，指導現場に有意義なコーチング法の提案を行ってきた．その中で，海外のコーチング(理論)は最終的に実践(選手の)とマッチングする特徴がある．また，個人の在り方，捉え方が欧米諸国と異なる一例として,欧米の指導現場で指導者と選手が議論している場面が見受けられるが，日本では特に若年層年代では選手が指導者に異議申し立てるという土壌は皆無に等しい.

そして我が国のスポーツの指導現場における最重要な課題として体罰による暴力事件があり，チームや個人のパフォーマンス向上の科学的なトレーニングの知識・技能だけでなく，「何のためにコーチングを行うのか」という，哲学や倫理等の人文・社会科学的課題(「スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議(タスクフォース)報告書」)を常にスポーツ指導の実践の根底部分において考えていくことが，今我が国の指導者には強く求められている.以上のような背景をもとに本研究は実施された。

２．研究の目的

申請者はこれまで，コーチングのグローバル化という課題に対して，海外の若年層年代の優れたコーチングの現地調査を通じ我が国の指導現場に提言してきた。昨今，日本オリジナルのコーチングの構築がますます求められていると同時に，体罰や権力関係による悪しき指導にも学術的調査や研究が貢献しなければならない課題が多い．そこで本研究はサッカーの指導現場における「クロス・カルチャー的」な調査研究を通じて，各国の文化的差異に関連付けながら指導方法・指導哲学に着目分析し，我が国のスポーツ指導に貢献できる新たな知見を得ることを目的とする．

３．研究の方法

・「クロス・カルチャー」研究の内容と方法

異なる文化の研究者(コーチング研究に従事する)が同時的にフィールドへ介入(鈴木晶子・Christoph Wulf『幸福の人類学』2013)することにより，内部(自文化)から見る現象(コーチング)と外部(他文化)からみるそれとが同時に生成し，各々の把握の枠組みを超え出るスタイル及び行為(思惟(文化的思考)様式)には，翻訳や議論等を通じた相互理解が不可欠である.そして，調査者各々の**文化的差異**から生まれてくるコーチングスタイルへの視点より，改めて自文化のコーチングスタイルを再発見する視座を得る(特に本研究では日本への視座)．そして，その実践を下支えしている思想(「何のためにコーチングを行うのか」から「どのように指導するか」へ)をより詳細に分析していくことに本研究で柱となるクロス・カルチャー的調査(研究)の可能性と意義がある．

指導スタイルは混成チームで調査対象チームの全スケジュールに「エスノグラフィー(Ethnography)」の参与観察の手法にて定性的データを収集することにより，異文化の指導法の個別性，独自性の現象を分析していく．コーチング哲学は，指導者への(混成チームによる)聞き取り調査及び内省報告調査から，成果を他分野研究者とも議論を通じて吟味し，最終的に各国のコーチング哲学を整理し資料を作成する．

・<分析の視点・モデル>

独立変数	媒介変数	従属変数
フランス	文化的差異	指導方法
ニュージーランド	(現地調査の視点)	指導哲学
日本		

・調査の実施内容

・「クロス・カルチャー」フィールド行動観察・インタビュー調査

2017 年 11 月 2 日，3 日，14 日，15 日に日本で実施された.

調査者　　中村泰介（研究代表者）
調査対象者　エリク・モンバエルツ氏(当時横浜Ｆ・マリノス監督)
研究協力者　松原英輝氏(当時横浜Ｆ・マリノストップチームコーチ兼通訳)

・「クロス・カルチャー」本調査混成チーム
2018 年 2 月～3 月に日本で実施された編成チーム
中村泰介（研究代表者）
Jean-Claude Lafargue 氏（フランスナショナルサッカー学院ディレクター）
松原英輝氏（通訳兼研究協力者・日本サッカー協会）

・2019 年 10 月に日本（園田学園女子大学）で実施された編成チーム
中村泰介（研究代表者）
Richard Light 氏（University of Canterbury Professor）

４．研究成果

(１)　「クロス・カルチャー」からみる我が国の「教育」と「スポーツ」の関係性

本研究の主とするテーマであるスポーツ指導(実践)は「教える行為なのか？」それとも「導く行為なのか？」ということに対して本調査から以下の知見が得られた。

教育システムの充実は子ども、選手のクリエイティブな側面の成長に影響する
→本問題は教育学の問題意識とも符合し、日本型教育の強みと弱みからスポーツ指導を再検討する視点を提供するものである．指導現場の「教える」、「導く」の議論を超えたスポーツ指導、コーチングの在り方を検討する必要性がある。本調査からも、日本のスポーツ指導は指導者、コーチが中心と見えてしまう現象は否めない．これは教育の在り方とも直結する問題でもある．例えば、ニュージーランドの子どもを中心にした教育現場では、子どもの主体性を軸に教員がはたらきかける．これを日本の教育現場で実現することは困難であろうが、スポーツ実践の現場においては、教育と切り離した実践の形態を構築できる可能性がある．

(２)日本人選手へのトレーニング実践からの視点

感情のコントロールが苦手である
→感情(Emotion)へ「注意の向けられ方」がヨーロッパと日本では異なる
トップパフォーマンスを目指す場合にプレッシャーがあり時間的余裕がない状況でのプレイは「感情のコントール」がとても重要となる．

主体性の希薄さ
→ある年齢を過ぎれば日本の選手は話すことをやめる．文化の問題であると同時に、日本的な「状況に応じた自己決定」の思惟様式が色濃くなってくる．特にジュニア期 9 歳～10 歳頃にその現象が顕著になる(調査時の分析)．

トレーニングがトレーニングで終わらないように
→トレーニング時には常に考えることをやめさせないコーチングが重要である．
さまざまシチュエーションを設定することにより，時に選手に不安定な環境を設定しながらプレイを選択させることが重要である

指導現場への提案

① 「感情のコントール」つまり「メンタル」を軸にしたプラニング
→プレイを選択する判断力にも強く影響する
エモーションをくすぐるシチュエーション設定

② 選手の実践が入り込むコーチング(理論)の展開
→質問するだけではなく、常に考えさせるために質問する
「戦術」・「テクニック」の両方からの理解をトレーニング時に促す

③ 主体性の所在　選手なのか？コーチなのか？
→文化的差異が大きく作用している・個人の在り方
選手ファーストのコーチングとは→日本型の「「Athlete-Centered Coaching」の構築
選手自身の意思決定に基づきプレイすることを前提にしたコーチング法

※本研究は新型コロナウィルス感染拡大防止に伴い、イギリスサッカークラブへの現地調査が中止になり、研究計画の変更点が生じたことを記しておく※

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 中村泰介・倉科勇三	４．巻 51
２．論文標題 創造のプロセスを捉えるための美術的あるいは運動的アプローチ	５．発行年 2017年
３．雑誌名 園田学園女子大学論文集	６．最初と最後の頁 pp.175-184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松山博明・松竹貴大・中村泰介・東亜弓・土屋裕睦	４．巻 2
２．論文標題 女子サッカーにおける日本とブータンの強化トレーニング内容の観点から	５．発行年 2016年
３．雑誌名 大阪成蹊大学紀要	６．最初と最後の頁 pp.121-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松山博明・中村泰介・二宮博・武藤克宏	４．巻 5
２．論文標題 アジアサッカー育成年代選手の競技力に関する研究－ブータン王国U-13代表選手の競技力と日本の同年代選手との比較から－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 追手門学院大学スポーツ研究センター紀要	６．最初と最後の頁 ｐｐ.3～ｐｐ.9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 中村泰介
２．発表標題 スポーツ指導における「クロス・カルチャー」調査研究の報告　日本とフランスの育成コーチングの比較調査から
３．学会等名 日本体育学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 中村泰介
２．発表標題 「サッカーの育成指導への提案～コーチング研究から見えてきたこと～」
３．学会等名 サッカーネットワーク交流会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 中村泰介・倉科勇三
２．発表標題 創造のプロセスを捉えるための美術的あるいは運動的アプローチ－J.J.ギブソンの遮蔽縁から考える子どもの活動－（
３．学会等名 日本幼児体育学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 中村泰介
２．発表標題 スマート･スポーツ、スポーツ・インテリジェンスと人間の関係性　次世代へ向けた身体理解の検討（第68回日本体育学会
３．学会等名 日本体育学会体育哲学専門領域
４．発表年 2017年

１．発表者名 中村泰介
２．発表標題 人間とAI技術の交錯 スポーツと身体の未来
３．学会等名 第42回「いのちの科学フォーラム」市民公開講座（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 中村泰介・倉科勇三・松山博明
２．発表標題 創造のプロセスを捉えるための美術的あるいは運動的アプローチ
３．学会等名 日本幼児体育学会
４．発表年 2016年

１．発表者名 鈴木晶子・山名淳・磯部洋明・中村泰介
２．発表標題 超スマート社会における人間性と教育
３．学会等名 教育思想史学会コロキウム
４．発表年 2016年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考